

留学生の孤独感のPAC分析¹⁾

内藤 哲雄

PAC Analysis of Loneliness of an International Student

Tetsuo Naito

問 題

孤独感についての心理学的研究は、1960年以前は臨床的観察によるものが大半であり、1960年代には出版物が増加し実証的研究も多くなってきたが、急速に実証的研究が発展したのは1970年代になってからである(Peplau, L. A. & Perlman, D., 1982)。しかしながらこのような見解は、孤独感を独立した単独のテーマとして扱う場合についてのみあてはまる。実証研究での先行的役割を果たしてきたのは、孤独感と重なり合う部分の多い疎外感の研究である。それは、Seeman(1959)が「疎外」を「疎外感」として捉えなおし、社会的孤立感、自己疎隔感、無力感、無規範感の構成因子からなると定義したことを受け、社会学者たちが試みた社会心理学的な調査研究に始まる。疎外という社会的客観的状况を疎外感として心理的主観的に捉えることについては、社会学分野や哲学分野において、理論的に鋭く対立してきた。心理学分野においては、心理学的側面から対象にアプローチすることは自明とされることが多いが、「孤独」と「孤独感」の関係についても、まず最初に論じておくことが必要であろう。

日高(1962)は、社会学者 Seeman が「行動者の個人的観点から」疎外を社会心理学的に扱うのを、社会心理学に傾斜した研究のすべてが無意味だとは考えないとしながらも、次のように批判している(p.1278-1279.)。

かりに疎外の心理学的側面に注目するとしても、それはフォイヤーなども指摘するとおり、決して単純なものではない。たとえば、「孤立」についていえば、孤立あるいはアノミーによる(心理的)「疎外」だけではなく、集合性あるいは過度の同一化に見あう「疎外」も存在するだろう。あるいは、「無力さ」による(心理的)「疎外」を考えるときにも、予想可能性の欠如だけが無力感の源泉なのではなく、むしろ歴史的将来の予想が完全に、とくに公式的に固定してしまうとき、逆に無力感が生れるということも起りうる。すなわち予測可能性の範囲が小さく限定される時、「われわれはより少なく疎外される」と感じるものもある。またたとえば、リーダーズ・ダイジェストを拒否するアヴァン・ギャルドが、心理的に「疎外されている」と考えられるのと同じ程度に、成功したアヴァン・ギャルドはそのあまりにも簡単なスター化によってふた

¹⁾ 本研究は、平成6年度文部省科学研究費補助金(一般研究C:研究課題番号06610106)による研究成果報告書、『個人別態度構造に関する研究』(内藤, 1995)の一部を改稿したものである。

たび「疎外される」こともある。あるいは自己の行動や生活にたいして「無意味さ」の感覚を持つものだけが「疎外されている」のではなく、人生あるいは社会について、ある狂信的な、あるいは教条的な最終目標を固執するものも、同じように「疎外されている」と言えよう。その意味では、「目的」と「手段」の区別から出発して、人格が手段的に取り扱われるとき、人間疎外が起るとも単純に言いきれない。人格が「目的」として扱われながら、しかもその「目的」にたいする執着が偏執的、狂信的なものとなるならば、そうした人格主義者もまた「疎外されている」といわなければなるまい。完全主義者はその一例である。同様のことは、リースマンのいわゆる、内部志向型、あるいは他者志向型についてもいえる。ジョン・デュウイは、ニューイングランド文化を批判し、その世界からの自己の分離、魂の肉体からの分離、自然の神からの分離などに「内がわへの裂け目」を見出し、それにたいして共有経験の優位を主張しようとしたが、そのとき彼にとっては、内部志向型の人間は、まさに「疎外された」ものだったにちがいない。逆に他者志向型の人間が「疎外された」ものでありうることを示すこともまた容易である。以上のような問題は、自己、他者、家族、神、国家あるいは部族に向けられる感情の質なのである。指摘は、一面では、疎外概念の複雑さ、あるいはあいまいさを示していると同時に、他面では、社会心理学的調査によって、疎外の心理学的側面だけでを尺度化することが、考えられている以上に困難であることを教えている。

上述した日高の見解では、同じく疎外感を生起させるといってもその要因はさまざまであり、一見すると対立すると思われる社会状況や対蹠的な社会的パーソナリティのいずれにおいても生起することを取り上げている。また、疎外感の質的内容は多様であり、単純な構成概念からなる尺度によってその全てを測定することができないことを指摘している。疎外感（あるいはその下位概念）と重なる部分の多い孤独感においても同様に、〈孤独感〉＝〈孤独〉と単純化することができないこと、生起要因と質的内容のいずれもが多種多様であるといわねばならない。この点は、心理学的研究をする場合にも看過してはならないといえよう。

それでは、主観的な孤独感を研究する意味はないのであろうか。まず一般論として、心理学的な立場からは、逆に主観的であることの方が意味を持ち得るといわねばならないであろう。客観的に孤立していること、孤独状況にあること自体が問題なのではなく、客観的状况を個人がどのように捉えて孤独を感じるかということが当該個人の内的（自我への）適応や社会的適応に影響する。それゆえ心理学的には、逆に現象学的な孤独感をこそ検討すべき対象であるということになる。すでに「孤独感」の研究開始に先行する社会学分野での「疎外感」研究において、社会的客観的側面を重要視する理論と心理的主観的側面を重視する理論との間にしばしば鋭い緊張や対立が生じながらも、総合得点と各下位得点を測定するための尺度開発と、これを利用した工場労働者などを対象とした調査研究でかなりの成果を上げた（例えば、Blauner, 1964）ことも追い風となった。こうした事情から、孤独感とは、ソーシャル・サポート研究なども連動しながら、現象学的データを科学的・数量的にアプローチしようとする「主観的行動主義者」（Miller, Galanter, & Pribram, 1960）にとって、格好のテーマとして取り上げられることとなった。ただしこれまでの調査研究は膨大であるけれども、日高が批判した疎外感におけると同様の問題、すなわち生起要因の多様性・複雑性、認知者による意味づけの差異の多様性を、汲み上げてきたとは言い難い。

既述のように、孤独感は現象学的に捉えられるべき主観的現象である。そこで、数量的な分析を試みる研究者も、研究の全体や一部において、手記、面接、自由記述を出発点とすることが多い。わが国においても、落合（1982,1983,1985）、広沢（1985,1986）、工藤（1986）、諸井（1989,1995）などで用いられている。しかしながら、それらのほとんどすべてが、各調査対象者の回答内容をバラバラに解体し、集団を対象とする調査項目や尺度構成の材料とする形で終わっている。確かに、バラバラに解体された項目によっても、他者との比較を可能にする標準化された尺度を作成することができ、多くの人に共通するいわゆる普遍的な変数を抽出することができる。これによって明らかにされた知見も多いといえる。ところが、いきなり集団データを集団全体あるいは下位集団間で分析する方法では、個人独自の変数のかなりの部分が残差成分として排除されてしまうことになる。そして、個々人における変数の内容は異なっている、それらを組み合わせたメカニズムの存在とその普遍性が見逃されることになる。例えば、落合（1999）は、集団データによる数量的分析では、「一番問題だったのが、ダイナミックさが失われたことです。『孤独でいたいけど、孤独ではいたくない』というようなアンビバレントな心理状態は、分析した結果には出てこないで消えてしまいました。（p.15.）」と述べている。そこで落合自身は、同一著書の中で事例研究の2つの章を加え、「事例研究もまた実証的研究です。事例研究と数量的研究を合わせた実証的研究をすることにより、説得力が大きく増大するのです。（p.ii.）」と記述している（筆者注：ここでの落合の「数量的研究」は、集団データによるものを指す）。

確かに、落合の指摘するように、特有性・複雑性・統合性そのものにアプローチするには事例研究法が有効である。この方法では、①孤独感に関わる多種多様な重要変数やメカニズムを発見したり個人レベルでの実在を検証することで、集団的数量分析による研究を補完するだけでなく、②当該個人に特有な孤独感の構造を解明・診断し、臨床的に関わることが可能である。とくに後者の臨床的見地からは、孤独感の強さや利用される防衛・対処機制の存在がわかるだけでなく、当該個人において、何によって、どのような種類の孤独感が生じ、具体的にどのような防衛・対処機制を用いているのかを明らかにすることができる。しかしその際には、理論的視点や主観が関与しやすい従来からの臨床的な事例研究法を、より操作的・客観的な方法へと発展させることが要請される。また、落合は「数量的研究」と「事例研究」とを対置させているが、事例研究においても数量的解析の援用を考えるべきであろう。こうした目的に適合すると考えられるのが、内藤（1993a, 1997）によって開発されたPAC分析の技法である。これは、当該テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、当人によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、研究者（実務者）による総合的解釈を通じて、個人別にイメージ構造を分析する方法である。これまでの研究で、性の欲求や行動に関するコンプレックスや心理的場の構造（内藤, 1994, 1998）、教師による担任学級の学級風土のイメージ構造（内藤, 1993b）など、多様なテーマで個人特有のイメージ構造を分析できることが明らかにされてきている。とくに『PAC分析実施法入門：「個」を科学する新技法への招待』（内藤, 1997）では、〈第Ⅲ部実施の実際例〉において「孤独感」についての分析例があげられており、そこでは個人特有の孤独感の構造を解明できること、多人数の統計データでは得難い貴重なメカニズムを析出できることが示されている。

そこで本研究では、日本という外国，異文化社会で学習し生活する外国人留学生を対象とした場合であっても，当該個人にとっての異文化適応と孤独感の関係を特有の現象世界（イメージ）の構造として把握することができるかどうか，また外国人留学生の孤独感の典型的構造の発見に有効であるかを，実験によって検討しようとするものである。

方 法

被験者 中国人大学院留学生女性1名（以下では被験者Aと略称）。母国中国で日本文化を専攻した後，日本の大学院で日本語教育を専攻している。本実験に必要な日本語での会話・読み書きの能力は十分である。

手続き 実験は面接室において全て日本語で実施された。まずはじめに，連想刺激として，以下のように印刷された文章を提示するとともに，口頭で読み上げて教示した。

「あなたは，どのような場面や状況で孤独を感じやすいでしょうか。そして孤独を感じているとき，自分がどんな状態にあると感じるでしょうか。また，どんな行動をしたいと感じたり，実際に行動しがちでしょうか。頭に浮かんできたイメージや言葉を，思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入して下さい。」

ついで，おおよそ縦3cm，横9cmの大きさのカードを40～50枚程度被験者の前に置き，頭に浮かばなくなるまで自由連想させた。このあと，今度は肯定か否定かの方向に拘わりなく重要と感じられる順にカードをならべ換えさせた。ついで項目間の類似度距離行列を作成するために，ランダムに全ての対を選びながら，以下の教示と7段階の評定尺度に基づいて類似度を評定させた。

教示と評定尺度 教示は，下記の〈教示と評定尺度〉が印刷された用紙を被験者に提示したまま，「 」の部分の口頭で読みあげることになされた。

「あなたが自身の孤独感に関連するものとしてあげたイメージや言葉の組み合わせが，言葉の意味ではなく，直感的イメージの上でどの程度似ているかを判断し，その近さの程度を下記の尺度の該当する記号で答えて下さい。」

- 非常に近い……………A
- かなり近い……………B
- いくぶんか近い……………C
- どちらともいえない……………D
- いくぶんか遠い……………E
- かなり遠い……………F
- 非常に遠い……………G

クラスター分析及び被験者による解釈の方法

上記の類似度評定のうち，同じ項目の組合せは0，Aは1，Bは2，Cは3というように，0から7点までの得点をあたえることで作成された類似度距離行列に基づき，ウォード法でクラスター分析した。ついで析出されたデンドログラムの余白部分に連想項目の内容を

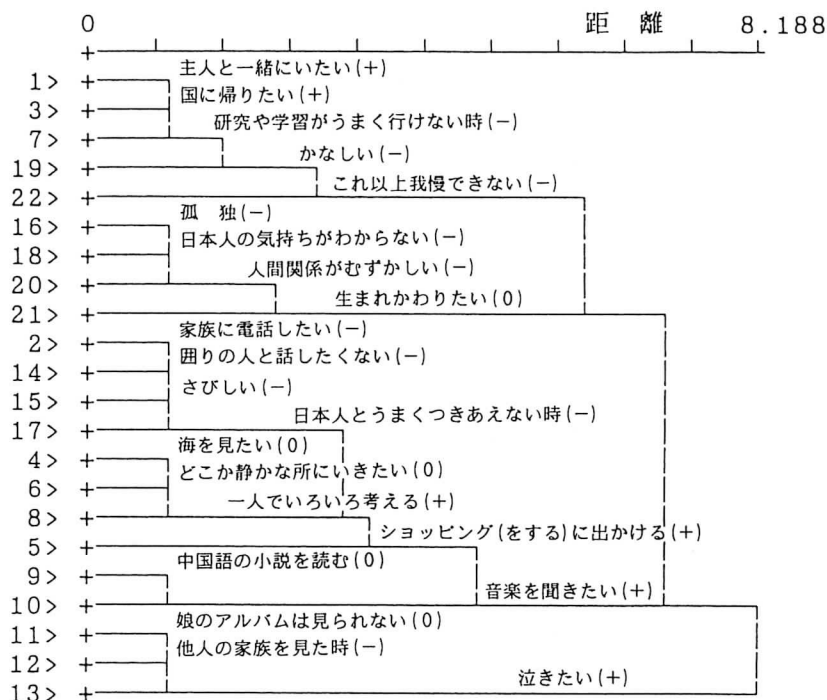


Fig. 1. 被験者Aのデンドログラム。

- 1) 左の数値は重要順位
- 2) 各項目の後ろの()内の符号は単独でのイメージ

記入し (Fig.1 参照), これをコピーして1部は被験者がもう1部は実験者がみながら, 以下の手順で被験者の解釈や新たに生じたイメージについて質問した。まず, 実験者がまとまりをもつクラスターとして解釈できそうな群ごとに各項目を上から読みあげ, 項目群全体に共通するイメージやそれぞれの項目が併合された理由として考えられるもの, 群全体が意味する内容の解釈について質問した。これを繰り返して全ての群が終了した後, 第1群と第2群, 第1群と第3群, 第2群と第3群というように, クラスター間を比較させてイメージや解釈の異同を報告させた。この後さらに, 全体についてのイメージや解釈について質問した。続いて, 実験者として解釈しにくい, あるいは被験者にとって深い意味を持つと感じられる項目をとりあげて, 個別のイメージについて補足的に質問した。最後に, 各連想項目単独でのイメージが, プラス, マイナス, どちらともいえない(0)のいずれに該当するかを回答させた (Fig.1の連想項目の後ろに付加された()内の符合を参照)。

結果と考察

被験者Aは, 20歳代後半の女性で, 大学院留学生である。夫も同じく日本に留学している大学院生であるが, かなり離れた都市の別の大学に通っており, 別居である。母国(中国)には娘を残している。来日前に日本文化を専攻し, 現在の大学院での専攻が日本語教育とい

うこともあり、日本語での流暢な質疑応答が可能で、実験にはまったく支障がなかった。クラスター分析の結果はFig.1のようになった。重要順位の高い順にはほぼ1/3までの理想項目をあげると、①主人と一緒にいたい、②家族に電話したい、③国に帰りたい、④海を見たい、⑤ショッピング（をする）に出かける、⑥どこか静かな所にいきたい、⑦研究や学習がうまく行けない時、となった。これら重要項目での単独イメージの全体は、プラスが3、「0」が2、マイナスが2で、留学に関連して生じる孤独感がプラスイメージとマイナスイメージとで拮抗、葛藤する形でまとまることを示す。次に全項目でのイメージをみると、プラスが6、「0」が5、マイナスが11となり、全体としては否定的イメージの方が強いことを示している。

〈被験者Aによるクラスターの解釈〉 クラスター1は「主人と一緒にいたい」～「これ以上我慢できない」までの5項目：何とか、あの、挫折にあったとき、このようなイメージが浮かんできて、そしてこの固まりをみると挫折にあったとき、いま日本にいるので孤独感が強い。いま一番会いたい人は主人で、主人しかいないし、国に帰りたい。今の感情。こんな一つの固まりとは思わなかったので、確かに自分の考えが一つの固まりに入ったような気がした。日本の大学に入って中国の勉強の仕方と違いますから、一番ショックを受けて孤独を感じました。あるときはすごいショックを受けて、これ以上は我慢できないという感じがありました。だいたいこのくらいです。

クラスター2は「孤独」～「生まれかわりたい」までの4項目：えーと、これは何ていうかな、悲しい、淋しいとか、これも孤独に関わっていますが、中国で日本人と日本文化を習ってきたが、実際はうまくいかない。気持ちが分からない。これが一番強くあります。これには自分の性格も関わっていて、あるとき生まれかわりたいと思った。この4つのものをみて、ちょっと反省してみると、自分は日本人とうまくつき合いたいという気持が強い。自分のすべてを話し相談相手になる人がいない。いま日本人とつき合っていて「一人だな」、「淋しい」という気持、孤独感が強い。

クラスター3は「家族に電話したい」～「音楽を聞きたい」までの10項目：うーん。これはいろんなことが入っていますが、いま考えてみると、これは、例えば1番（クラスター1）だったら研究と学習に関わっている。2番（クラスター2）は人間関係。3番（クラスター3）は家族に対する考えが強い。娘を中国に置いて来ている。そのことを日本人に話しても分かってくれない。中国から娘を連れてく（こ）れない。経済的なことで。そのことについてあんまり日本人に話したくない。海に行きたい。家族のことを思っているとき、好きな海の波、雄大な波をみて、自分の気持がだんだん穏やかになる効果がある。静かなところというのは、自分の気持から落ち着きたい。中国の小説というのは、今の日本のことを考えたく（ない）、ショッピングも何も考えたくない。音楽は中島みゆきの歌が好きで聞いている。それ以外は好きじゃない。悲しい曲が好き。今の孤独感が反映している。反省している。今の自分の気持を確かめたい気持が強い。私は中国人なので、祖国の古さ、伝統、その気持が強い。あんまり日本人の中に飛び込んでいないことを表明しているかも知れない。うん、これです。

クラスター4は「娘のアルバムは見られない」～「泣きたい」までの3項目：これはやはり先ほど申し上げたように、いま中国に娘を置いているので、中国に娘を置いて来たので、

アルバムを見たとき、勉強をやめて中国に帰りたい。挫折したとき、辛いときは娘のアルバムは見られない。もちろん見て泣いたときもある。一家団欒の人を見ると辛くなる。一人で勉強していると、このようなイメージが浮かんでくる。これは家族で、離れている家族のこと、現実を感じる。

クラスター間の比較：《クラスター1と2の比較》1番は主に今の研究とか学習に関わる部分。2番は学校内を含めて、日本人とか友達との人間関係が中心だと思います。例えば、1（クラスター1）の今の研究、授業のレポートがうまくいかないとき、一番相談したくなるのは主人。勉強をやめて中国に帰りたいと感じる。2（クラスター2）は性格についてで、外見から見ると明るいと思われているが、自分の内面のいろいろは話させ（話せ）ない。とっても親しい日本人がいないので、2が出てくる。自分の性格も関わりがあるので生まれかわりたいと思う。

《クラスター1と3の比較》1番は主人と一緒に話したい。誰かを相手にして自分の気持ちを話したい。3番は自分の気持ちだけ考えて反省している。海に行くとか、自分はこれからどうすればよいかを反省して、自分自身がどうある（べき）かを考えているように思います。

《クラスター1と4の比較》とくに4番の場合は家族のことを中心として考えてみたようで、1番と違う。4番は娘で、とくに他人の家族を見ると辛い。日本に来た頃他人を見ると辛くなって、娘のことを考え出すと辛くなって帰りたい。1は日本での学習や勉強に関わっているといます。

《クラスター2と3の比較》考えるのは、2番は大雑把な自分の気持ち、3番はどのような手段をとっているかのようです。いま考えてみると、2番は日本とうまくいってないこと、3番はどのようにして立ち直るか。日本人とうまくいかないで、日本人に話したくない。自分の気持ちを、音楽や小説を読む、そんな中で自分の気持ちを発見すればほっとする。海を見ていると、波が高いと怒（[おこり]）と読ませる「怒」の字は被験者に確認）を含んでいると、パッとなくなると、自分の怒や不安が話し出したような感じで見ていると、自分の気持ちが落ち着いてくる。このような感じが自然に出て来るんです。

《クラスター2と4の比較》これはほとんど関係ないと思う。つまり2種類の孤独。2番は日本人との孤独。4番は家族と離ればなれの孤独。まわりは一家団欒。自分だけは家族と離れている。そのように感じている孤独だと思います。

《クラスター3と4の比較》いま考えてみると、4番は3番に含まれているような感じがしますが、自分は娘への気持ちが強いのでこんなになっていると思う。4番が強いとき、3番の手段を使います。4番は、たぶんこの4番は私を一番孤独にさせる部分だと思います。学校の行き帰りに、（他の人が）家族を連れているので、これを見て泣きたい気持ちが強かった。こんなとき、海を見たり、ショッピングしたり、家族に電話して発散しているような気がします。

補足質問：「泣きたい」……（これは単独でのイメージがプラスと回答された後に質問）泣いてから気持ちがほっとする。

《被験者Aについての総合的解釈》 クラスター1：同じく日本に留学してはいるものの、かなり離れた都市で生活している「主人と一緒にいたい」との思いが強く、日本と中国とでは勉強の方法が異なるので「研究や学習がうまく行けない時」「かなしい」と感じ、「これ以

上我慢できない」と感じることもあり、主人に相談したくなり、勉強をやめて「国に帰りたい」と思う。これらは、〈学習の困難さと望郷〉の内容でまとまっているといえよう。

クラスター2：本国である中国で日本人と日本文化を習ってきたが、「日本人の気持ちがわからない」し「人間関係がむずかしい」ことで、強い「孤独」を感じる。自分の性格による影響が関わっていると思い、「生まれかわりたい」と感じる。このクラスターは〈日本人との共感困難による孤独と性格不適応感〉と名づけることができよう。

クラスター3：このクラスターは、本来の自己に向き合う形での対処行動からなると考えられる。「日本人とうまくつきあえない時」や家族を連れてくる日本人らを見て、挫折を感じたときは、日本人などの「困り（[まわり]と読ませるとのこと）の人と話したくない」と感じ、「家族に電話したい」と思い電話する。また、「海を見たい」との思いが募り、海の波を見て悩みを発散する。また、「一人でいろいろ考える」ことで自分のあり方を見つめ直すために、「どこか静かな所にいきたい」と感じる。そして、「ショッピングに出かける」とか「中国語の小説を読む」とか、「音楽を聞きたい」と感じ中島みゆきの悲しい曲を聞くことで、本来の自分の気持を取り戻そうとする。これらは〈鬱積した孤独感の解消法〉としてまとまっているといえよう。

クラスター4：これは国に置いて来た娘に関するものである。学校の行き帰りに繰り返し「他人の家族を見た時」、大学での勉強や日本人との関係で挫折しているとき、「娘のアルバムは見られない」。家族が離ればなれでいる現実を感じさせる。このようなとき「泣きたい」と感じ、泣くことで気持ちがホッと救われる。また、クラスター3の対処行動による発散を試みる。このクラスターは、〈娘との別離による孤独感とその解消〉と命名することができよう。

全体として：(1)日本に留学して研究や学習することが、日本人との人間関係の問題を生じることになる。また(2)本国である中国に娘を残して来ることになった。日本のことである(1)と、中国のことである(2)との、両者の問題の中間に来るのが(3)自己のあり方、自己の孤独感への対処法であると考えられる。これをクラスターの連鎖として捉えると、〈学習の困難さと望郷〉→〈日本人との共感困難による孤独と不適応感〉→〈鬱積した孤独感の解消法〉←〈娘との別離による孤独感とその解消〉のように、図式的に表記できるであろう。

ここで各クラスターを結節する項目に注目すると、「これ以上我慢できない」→「生まれかわりたい」→「音楽を聞きたい」→「泣きたい」となる。結節の項目はクラスターを象徴する意味を持ち、それらの結節の内容や連鎖から読みとれるものは多い。同じく日本に留学しながらも別の大学に通う夫とは離ればなれで生活しなければならず、研究や学習がうまくいかない国に帰りたくなり「これ以上我慢できない」と感じることと、日本人の気持ちがわからず人間関係がむずかしく孤独になり「生まれかわりたい」と感じることが結節される。第1クラスターと第2クラスターは、異国日本で一人で学習・研究をし日本人と付き合う際に解決の困難さを感じるもので、留学にともなって直接的に発生する孤独感の源泉である。

第3クラスターは、日本人とうまくつきあえないときさびしくなり、自分を囲む周りの人とはなく、家族と話したくなる。これは孤独を実感している場面・状況の描写であり、静かなところに行ったり、大好きな海を見て、ショッピングをしたりや母国語の小説を読んで、

また音楽を聞くことで孤独な状況を紛らわし、解消する対処法である。音楽は孤独感を反映する悲しい曲で、中島みゆきの歌を好んで聞く。日本の音楽で唯一の好きなものである。日本人の曲が選ばれているというのは、無意図的にであろうが、日本にいてをどこかで感じ続けながら、その中で孤独を癒やそうとしていることが推測される。

第4クラスターは、母国中国に残してきた娘との別離による孤独感とそれによって悲しみという情動喚起が生じ、泣くことそのものによって癒やされる。このようにして、第3クラスターまでの異国である日本での孤独とそれを癒やす中島みゆきの悲しい「音楽を聞く」と、第4クラスターの母国の娘との別離による孤独と強い悲しみから生じ同時にそれを癒やす「泣きたい」という項目が、〈癒し〉という共通点によって最終的に結節されることになるのであろう。

クラスターの結合はすべての項目の結合が完了するまで続けられるので、結節が最終であるということは、結節が最も困難であることをも意味する。従って、孤独感に関するものであるという点では全てのクラスターが共通であるが、第1クラスター、第2クラスター、第3クラスターの日本に関するグループと第4クラスターの母国の娘に関するものとは異質であるということになる。すなわち、日本での勉学や日本人との交流がどんなにうまくいっても、母国の娘との別離による孤独感は解消されないことを示している。しかしながら被験者Aにおいては、日本での適応困難さに関する孤独感、「中島みゆきの曲を聞く」という日本的なもので癒される。そして母国の娘との別離の悲しみは、「泣く」ことで癒やされる（泣くことでしか癒されないのであろう）。家族離ればなれでの外国留学による孤独感を強く感じることはあるものの、それを解消することができる適応的な状態レベルにあると診断することができる。このことは、孤独感への対処行動である第3クラスターの「音楽を聞きたい」と第4クラスターの「泣きたい」が、いずれもプラスイメージとして結節されていることから裏づけられよう。

ここで、先に被験者の特有性に沿って命名した〈学習の困難さと望郷〉→〈日本人との共感困難による孤独と不適応感〉→〈鬱積した孤独感の解消法〉←〈娘との別離による孤独感とその解消〉の図式を、より一般的な外国人留学生という枠組みに沿って〈外国留学での学習困難と望郷〉→〈留学した国の人々との共感困難と不適応感〉→〈鬱積した孤独感の解消〉←〈母国への郷愁による孤独感とその解消〉という図式へと読み換えるならば、「外国人留学生の孤独感とその解消」としてのある種の典型例とみなすことができる。

以上のような本研究でのPAC分析の結果は、外国人留学生の孤独感に関して、①当該留学生に関わる多種多様な変数を当該個人が特有にイメージする構造として、解析し診断的評価を試みる事が可能であること、また②ある種の典型の発見に利用できることを示唆するものである。すなわち、PAC分析によって、外国人留学生の個々人が特有に認知（イメージ）する、多種多様な変数が複合され統合された孤独感の構造を個人別に分析できること、普遍的なメカニズムを発見できることを示唆している。このことは、孤独を単純に孤独感と読み換え、安易に作成された共通尺度で調査研究することへの批判に答えることにもなる。また、本研究では在日年数の比較的長い留学生を対象として日本語での分析をしているが、井上・伊藤（1997）が外国人留学生を対象としたカウンセリングで試みたように、外国人留学生の母語で分析するならば、異文化適応が最も問題となりやすい留学初期段階での孤独感

に関する診断・治療や研究に威力を発揮するであろう。報告は日本語であるとしても、被験者（クライアント）による項目連想やクラスターに関するイメージの探索は母語で行うことも可能である。診断・治療面での有効性について実証研究した井上（1998）は、「PAC分析は、治療や発達援助の手がかりとして、①クライアントの主観的世界から出発し、②統計的アルゴリズムによる客観性を保持しつつ、③表出された意味の共同作業による再構成と対話の過程での解釈による意味の共有という、他に類例のない特長を有する技法であるといえる。（p.302.）」と記述し、関係者へのコンサルテーションの資料として威力を発揮することにも言及している。PAC分析の理論と技法の普及、実践への利用による実際の技法の発展が望まれる。

引用文献

- Blauner, R. 1964 *Alienation and freedom : the factory worker and his industry*.
 (ブラウナー R. 佐藤慶幸(監訳) 吉川栄一・村井忠政・辻 勝次(共訳) 1971 労働における疎外と自由 新泉社)
- 日高六郎 1962 現代における自己疎外 思想, 460, 1274-1280.
- 広沢俊宗 1985 孤独の原因, 感情反応, および対処行動に関する研究(I) 関西学院大学社会学部紀要, 51, 157-168.
- 広沢俊宗 1986 孤独の原因, 感情反応, および対処行動に関する研究(II) 関西学院大学社会学部紀要, 53, 127-136.
- 井上孝代 1998 カウンセリングにおけるPAC(個人別態度構造)分析の効果 心理学研究, 69, 295-303.
- 井上孝代・伊藤武彦 1997 異文化間カウンセリングにおけるPAC分析 井上孝代(編著) 異文化間臨床心理学序説 第4章 多賀出版, 103-137.
- 工藤 力 1986 思春期の孤独感に関する研究 心理学研究, 57, 293-299.
- Miller, G. A., Galanter, E. H. & Pribram, K. 1960 *Plans and the structure of behavior*. Holt.
- 諸井克英 1989 大学生における孤独感と対処方略 実験社会心理学研究, 29, 141-151.
- 諸井克英 1995 孤独感に関する社会心理学的研究 風間書房
- 内藤哲雄 1993a 個人別態度構造の分析について 人文科学論集(信州大学人文学部), 27, 43-69.
- 内藤哲雄 1993b 学級風土の事例記述的クラスター分析 実験社会心理学研究, 33, 111-121.
- 内藤哲雄 1994 性の欲求と行動の個人別態度構造分析 実験社会心理学研究, 34, 129-140.
- 内藤哲雄 1995 個人別態度構造に関する研究 平成6年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書
- 内藤哲雄 1997 PAC分析実施法入門:「個」を科学する新技法への招待 ナカニシヤ出版
- 内藤哲雄 1998 恋愛の個人的態度構造 松井 豊(編) 現代のエスプリ368 恋愛の心理 至文堂, 163-173.
- 落合良行 1982 孤独感の内包的構造に関する仮説 教育心理学研究, 30, 69-74.
- 落合良行 1983 孤独感の類型判別尺度(LSO)の作成 教育心理学研究, 31, 60-64.
- 落合良行 1985 青年期における孤独感を中心とした生活感情の関連構造 教育心理学研究, 33, 70-75.

- 落合良行 1999 孤独な心：淋しい孤独感から明るい孤独感へ サイエンス社
- Peplau, L. A. & Perlman, D. 1982 *Loneliness : a sourcebook of current theory, research and therapy*. John Wiley & Sons, Inc. (ペプローL. A. & パートンD. 加藤義明 (監訳) 加藤義明・渡邊芳之・渋谷昌三・長田久雄・工藤 力・松井 豊・古澤照幸・落合良行・広沢俊宗・若林佳史・西川正之(訳) 1988 孤独感の心理学 誠信書房／ほぼ半分の抄訳)
- Seeman, M. 1959 On the meaning of alienation. *American Sociological Review*, 24, 783-791.